

## 子どもたちのよりよい生活(グッドライフ)をめざして

どんな性問題行動も、その行動を通して子ども自身が満たそうとしていた欲求(ニーズ)があります。性問題行動は、性的な欲求によるものと思われがちですが、実際には、「寂しさを埋めたい」「自分の強さを実感したい」「だれかとつながりたい」といった心理的欲求や人間関係を求める気持ちによって生じることが多いものです。充足する方法はまちがっていても、ニーズ自体は自然なものです。

子どもの真のニーズを理解し、より健全な方法でニーズを充足できるよう、生活環境を整えたり、スキルを教えていくことが大切です。子どものよりよい生活(グッドライフ)のための具体的な支援プランをたて、施設や学校、地域で取り組んでいきましょう。



## 職員の支え合いとセルフケアを心がけましょう



### 職員自身が、子どもの性暴力によって傷ついていることを意識しましょう

子どもたちの間で性暴力が起きたと知ることは、職員にも強いショックや無力感をもたらします。その苦しい気持ちを、被害児童や加害児童、まわりの子どもたち、あるいは施設の同僚や児童相談所の職員などに向けてしまうことがあるかもしれません。

「どうしてこんなことが」という怒りを感じたり、「だれも助けてくれない」という不信感や孤立感も高まりやすくなります。

**否認・ショック** 「まさか」「信じられない」「どう考えてよいのかわからない」

**自責感** 「自分が気づけなかったせいで」「なにか見落としていたのかも」

**回避・最小化** 「考えたくない」「もう忘れない」「たいしたことではない」

**怒り** 「なんてことをしたんだ!」「なぜ、すぐに言わなかったの!」「だれかのせいだ」

**孤立感・喪失感** 「裏切られた気分」「だれも助けてくれない」「これまでの日々はなんだったの…」

こうした心情は、性暴力を目の当たりにした際に生じる自然な反応です。しかし、それが性暴力の影響によるものだと自覚できないと、職員のチームワークに亀裂が入ったり、施設と児童相談所(あるいは家庭)との対立関係に陥ったりしてしまうでしょう。

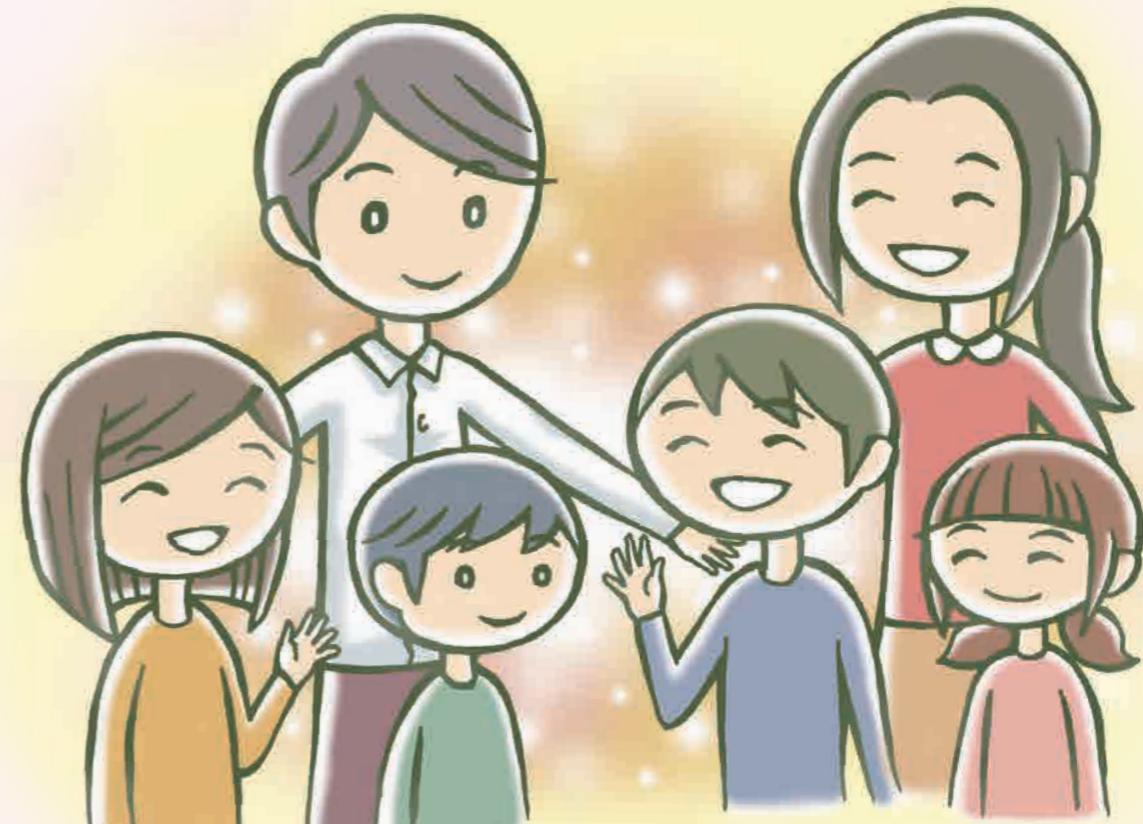
自分の気持ちを落ち着かせ、意識を前向きなものに切り替えるようなセルフケアを積極的に取り入れましょう。職員同士でお互いの気持ちや考えを伝え合い、意識してコミュニケーションを増やすこと。また、客観的に事態を見ることのできる第三者に相談するなど、施設全体がサポートを受けることも大切です。



## 職員のセルフケアや良好な人間関係が、子どもたちの回復のモデルになります

# 安心・安全な くらしのために

## ～施設内での性問題行動の理解と支援～



### 施設内の性問題行動に対応する職員の方へ

これは、施設内の子どもの性問題行動に対応する職員(支援者)のためのリーフレットです。性問題行動の予防のために、事前に職員が知っておき、日常生活で気をつけること、また、実際に性問題行動に気づいたときに、取り組まなければならないことや留意すべき点について、まとめています。

職員は、安全を守るために、子どもの性的な言動のどこが問題なのかを判断して、適切に対応することが求められます。ですが、日常的に関わっている子どもの性問題行動に直面することは、職員にとっても大きなストレスになります。安全で安心できる環境を取り戻すために、職員は落ち着いて対応しなければなりません。

セルフケアをこころがけ、職員同士で協力しながら支援にあたりましょう。

## 施設内でみられやすい性問題行動

性問題行動は、子どもの年齢相応の遊びや同意のある性行為とは異なります。子どもの発達に悪影響を及ぼし、子どもの心身に傷を与える可能性があります。職員が気づかぬうちに性問題行動がエスカレートしたり、被害や加害に関わる子どもたちが増えしていくなど、事態が深刻化する傾向があります。

施設内でみられやすい性問題行動には、次のようなものがあります。



### 子ども間の力や立場などパワーの差を利用して、性的な行為を強要するもの

二者間あるいは複数の子どものなかで、年齢や精神的な発達、体格、施設で暮らしている期間といった力(パワー)を利用して、性的な行為を強いるもの。立場の弱い子どもは、断ったり、逃げたりすることができず、相手の要求に応じるしかないとthoughtしたり、あるいは、仲間として認めてもらうために自分から性的な行為をすることもあります。施設内では、同性の子ども間で起こる場合が少なくありません。



性暴力を受けた子どもは、身近にいる加害児童をおそれたり、職員に叱られるのではなくかと思ったりして、なかなか被害を打ち明けることができません。子ども自身も、「断らなかった自分が悪い」と自分を責めたり、「よくあること」と思い込んだりしてしまいます。



### 子ども同士で、寂しさや満たされなさを性的な行為で充足させようとしているもの

強制はなく、双方が望んで性的な行為に至っているようにみえるもの。あからさまな威圧や暴力は用いないものの、本来、大人から得られるべき安らぎや安心感を、他の子どもとの触れ合いで充足させようとしています。つまり、こうした性行動は、寂しさや不安をかかえた子どもの対処法の一つであり、子どもの課題を表すサインといえます。双方の子どもが秘密にしているため、表面化しにくく、注意をしてもなかなか収まらないのが特徴です。



また、自己充足的な行為であるため、子どものストレスが高まると性行動の頻度や内容がエスカレートして、性暴力に発展することもあります。



### 年齢不相応な性的な発言や行動が目立ち、性的なトラブルを起こしやすい

性的虐待を受けた子どものなかには、状況にそぐわない性的な話をしたり、他児や職員にペタペタ触れたり、肌を露出した格好を好んだりすることがあります。こうした言動のために、施設で暮らす他の子どもに影響を与えたり、施設や学校での適応や人間関係がうまくいかなくなったりがちです。そのため、ますます自尊心が低下し、自暴自棄になったり、性犯罪にあう危険性が高まりします。



こうした過剰な性的言動は、性被害によるトラウマが影響している可能性が考えられます。子どもの混乱した気持ちを受けとめ、トラウマによる反応や症状のケアをすることが求められます。



### これは遊び? それとも性問題行動?

発達が同程度の幼児がお医者さんごっこをしたり、性器を見せ合ったりすることは、一般的にみられる遊びですが、からだを傷つける方法を用いたり、相手が嫌がっている、頻度が高い、注意をしても繰り返されるといった場合は、性問題行動とみなされます。また、思春期の子どもが性に関心をもつのは自然なことですぐ、性にばかりこだわり、性的な行動が突出している際も、注意が必要です。年齢や立場といったパワーの差がある子ども間の性行動は、性暴力と捉えられ、被害と加害の双方の子どもへの支援・介入が求められます。

## 施設内で子ども同士の性問題行動が起きたとき

子どもの性問題行動は、どの施設でも起こりうるものと考えておきましょう。施設内の子ども間の性暴力に対応する際の留意点を挙げます。落ち着いて、対応することが大切です。

### ① 子どもの変化や異変を見過ごさないようにしましょう

子どもの様子や行動の変化に気づいたら、「どうしたの?」と子どもの話を聞く姿勢を示します。子どもにとって、自分自身や身近に起きた性問題行動を大人に打ち明けることは、難しいものです。だからこそ、日頃から職員がサポート型で、暴力を許容しない態度をみせることが大切です。それにより、被害を受けた子どもだけでなく、周囲の子どもも大人に相談しやすくなります。

被害を受けた子どものSOSは、さりげなく出されることが少なくありません。そのため、職員が「たいしたことではないのかな」と聞き流してしまいがちです。また、被害を打ち明けられても、にわかには信じられなかったり、ふだんの子どもの言動から、「きっとまた、大人の気を引こうとしているだけだ」などと決めつけたりしてしまうこともあります。子どもの話を聞き流してしまうと、子どもは「大人に守ってもらえないかった」と感じ、さらに傷つきが深ります。ますます無力感を強め、大人に話すことをあきらめてしまいます。



### ② 被害児童の声にしっかり耳を傾けましょう

子どもたちから聞き取りをする際、被害を受けた子どもの説明があやふやで、一貫しないことがあります。一方、加害をしたとする子どもは、はっきりと否定したり、時には涙を流しながら弁解したり、整然と話をすることがあるため、話の筋が通っているように聞こえます。そのため、加害児童の言い分が重視されがちです。職員も、施設内で性暴力が起きたという事実を信じたくないという否認や、「たいしたことではない」と思いたい心理によって、子ども間の性問題行動を過小評価する傾向がみられます。

性暴力を受けた子どもは、ショックや混乱からこころを守るために意識を切り離そうとして、時間の感覚や記憶が曖昧になることが少なくありません。また、被害が長期に及んだ場合、いつ、どんなことをされたのかを説明するのは一層困難になります。

### ③ 被害児童の安全を確保しましょう

施設内の子ども間の性問題行動が疑われたときには、原則的に、調査の段階から、被害児童と加害をしたとされる児童を分離します。本当のことを話すと危害を加えられるかもしれないという不安や恐怖がある限り、子どもは正直に打ち明けることができません。施設で暮らす子どもたちは、大人が想像する以上に、強い上下関係のなかで生活していることを忘れないように。

被害を受けた子どものプライバシーが守られ、安心して施設での生活が続けられるように最大限の配慮をしましょう。

## 安心・安全な環境づくり～性問題行動の予防と再発抑止のために～

安心・安全な環境づくりのために、以下の5つのポイントから職員と子どもとの関わりを見直す機会を設けましょう。

